○岩出市長賞（高校生）

「税と私たちの未来」

和歌山県立那賀高等学校　二年　竹田　百花

みなさんは「税金」と聞いて、何を思い浮かべますか。私は正直なところ、買い物をするときに引かれる消費税で手元のお金が減ってしまうということが今でも頭に浮かんでしまいます。中学生のときも税金の仕組を教わったので社会のために役立っていると理屈は分かっているつもりです。それでも、自分の自由になるお金が減っていくのは負担に感じてしまうなというのが私の本音でした。しかし、過去の自分の経験や日々の学校生活を改めて振り返ったことで、税に対する見方が変わりました。

私が小さかったとき、高熱で痙攣を起こしてしまったことがあります。焦った母がすぐに救急車を呼び隊員の方から「もう救急車は向かってます。安心してくださいね。」と言ってくれたそうです。母はその言葉を聞いたとき涙が出るほどホッとしたと話してくれました。私はその話を聞き、見ず知らずの自分たちのために、いつでも必死に助けに来てくれる存在がいることの心強さを強く感じました。この「助けが来る」という気持ちや大きな安心感は、多くの人が少しずつ出し合った税金によって守られているのだなと気づけました。もし税金がなければピンチの瞬間に誰もが平等に安心感を得ることができません。さらに救急車やパトカーがスムーズに通れるのは、道路が整備されていたり、ゴミ収集車で街を綺麗にしてくれる清掃員さんの活動も、すべて税金で支えられているのだと分かりました。私たちの命や安心は、目に見えない仕組みによって守られているのです。

またこうした特別なときだけでなく、私たちが毎日使えている学校の教科書や机、校舎の設備なども、税金で用意されています。高校生である私が不自由なく勉強できる環境も税金を払って支えてくれるおかげだと身近に感じれるようになりました。

税金が高くて損をしているように感じるのは、その恩を普段私自身「当たり前」だと思ってしまい忘れているからだと思います。将来私が大人になって働くようになったら、今度は私がしっかりと税金を納める番です。社会全体で少しずつお金を出し合って支える一員として、誰かの安心を守り、より良い未来になってほしいです。